

次の世代に伝えたい

—「嗚呼 満蒙開拓団」自主映画会に関わって—

渡部 通恵

この映画に出会うまでは満蒙開拓団とか満蒙義勇軍とかという言葉も意味も知りませんでした。知らないことを知ることから、すべては始まるということで、上映にかかわることから始めました。

周恩来首相が軍部（組織）を憎んで人を憎まず、と言われたことは当時の疲れて弱っていた日本人にとっては、救いの言葉だったろうと思います。

知らされていなかった、知らなかったとは言え逃避行になった時の現地住民の態度で自分たちが加害者として、彼らには認識されていたことを、まず一番に肝に銘じなければなりません。その部分が少々希薄だったように見ましたが、どうでしょうか。

日本人は、外敵に国土を蹂躪されたことがないので、やさしいから、物事をうやむやにして、次世代へ禍根を残しています。

加害者の屍を拾い集め弔う墳墓を作り、守り、伝えてこられたことは広く皆さんに知ってもらって、方正の方々をはじめ、中国の人々がいかに心を広く大きくもっておられたかを感じてほしいです。

個々人の小さな思いは、大きな組織・仕組みの前では何ほどのもんかということなんですが、そこを大切にしなかったから、現在のような社会になってしまったのではないのでしょうか。

声を挙げていき、また挙げつづけることがいかに苦労を伴い心を疲れさせるか、多くの先人は示してきてくださいました。

先人の知恵を、あとに続く私たちは次の世代に伝えていく義務があります。そのツールのひとつとして、この映画は価値があるし、またそう使っていくことが私たちに託されたことなのでしょう。

先日、義勇軍で満州に渡った方のお話を聞く会を持ちました。あの時代にあの地に生きて、というこの映画の関連の会でした。多くの関係者と思われる方々が聞きにこられていましたが、皆さん高齢で、今までの思いをこのままあちらの世に持って行っては忍びないという感情が、会場にあふれておりました。映画会場もそうでした。始まる1時間以上も前にきて待っていてくださった多くの皆さんから、一様にその思いが伝わってきました。

貧しい村の口減らしのために、時の政府に踊らされた方々の悔しさ、情けなさは映画から伝わってきました。それを確認にいらしたんだと納得しました。心の整理のために。

朝鮮民主主義人民共和国に、核を持たせてしまった私たちの責任は、この映画の出発点にあります。そういう意味でも、いまだに私たちは加害者であり続けていることを、自覚しながら、どうやったら少しでも心を軽くすることができるのかを、模索し続けて、人類の未来を明るくすることを目的に、また、日々の活動をしていくことになるでしょう。

2月21日、”対立の世紀から共生の世紀へ”という平和シンポジウムをしました。島根県は、日本海にある竹島（独島）という岩の島を、わが国固有の領土だと主張するために、竹島の日（2月22日）を5年前に制定しました。それを機に韓国との民間交流を含めて関係が悪くなり、子どもたちは修学旅行がなくなったり、スポーツ交流もできなくなりました。この対立を煽る言葉を、平和を構築する言葉に置き換えることも目的として開催した会でした。パネリスト・参加者の皆さんと、竹島を対立の種から平和の種になるように、知恵を絞りあい、寄せ合って採択した平和宣言を添付します。

この平和宣言は朝鮮・韓国・日本・アメリカの政府へ届けます。

竹島に近いところに住むものの責任があります。瞬時に情報が世界へ伝わる時代と、平和を願う人々があります。朝鮮・韓国・日本から基調講演をしていただいて、三つの国の参加者の皆さんが手をとっていっしょに踊りました。壮観でした。

平和宣言

日本海＝東海を囲む北東アジアから世界の平和の構築をめざして、私たちは集いました。

竹島＝独島を、対立を煽る領土問題としてではなく「平和の礎」とし、「竹島の日」を平和の日と位置づけ、ひとりひとりが何をなすべきかを共有しました。

民族・宗教・領土問題の解決方法を戦争に求めた過去に向き合い、記憶し、語り継ぎ、歴史の教訓を平和の構築に向けた力にしていきます。

朝鮮半島と日本の非核化と、世界の核の削減の過程を通じて、人類の平和な未来を拓くように私たちは手を携え、力を合わせていきます。

構造的な暴力である貧困と差別をなくし、すべての人の尊厳が尊重される、「積極的平和」な社会を創造していきます。

2010年2月21日 平和アピール実行委員会

（わたなべ・みちえ：稼業の籐家具専門店の店長の傍ら、子どもは世界の宝という信念から、アフガニスタンの学校建設市民活動団体代表や、教育・社会・自然環境の改善、保全、継承と暴力のない平和な世界の構築をめざして、日々活動している。59才）